

# 観戦ではない、参戦だ

supporting the players is our game.

## 「運営」として参戦するという選択

一関の夏を彩った熱い戦いの裏には、「運営」に全力をささげる人たちのドラマがあった。表舞台を舞台裏が支えてこそ、大舞台は成立する。



## 運営に携わることも「参戦」 試合に出場することだけが 「参戦」ではありません

「全国中学校バスケットボール大会」は、部活動の集大成となるビックイベント。岩手での開催に向けて、構想に3年を費やしました。実行委員会を立ち上げて2年、準備に万全を期しました。

大会を開催するには、多くの役員が必要です。会場になった一関市や奥州市の中学生にも、役員として参加してもらいました。その数、400人超。運営にあたって、大きな力になってくれました。

大会の成功はもちろん、「心を尽くし、人情味あふれる温かい大会」にすることを目標にしました。役員は、係の仕事やあいさつに一生懸命取り組んでくれました。本当に感謝しています。

試合に出場することだけが「参戦」ではありません。運営に携わることで、達成感を味わえます。また、ハイレベルな試合を間近で観戦できるチャンスでもあります。今回、役員として活躍した生徒たちのモチベーションも上がったのではないのでしょうか。私自身も夢の「全中」の運営に携わることができ、充実感と満足感でいっぱいです。



## 第45回全国中学校バスケットボール大会実行委員会 千葉雄二 事務局長

PROFILE / 1969年陸前高田市生まれ。小学校から高校までを一関で暮らす。92年教員となり、宮古市立津軽石中学校に赴任。その後、桜町中を経て、一関中へ。保健体育を担当し、バスケットボール部の顧問。人間形成を教育方針として教壇に立つ。全中大会実行委員会の事務局長。



1\_全国中学校バスケットボール大会を支えた地元中学生。真剣な表情で打ち合わせ / 2\_フロアキーパーを務めた東山中生徒。機敏な動きで選手をサポートした / 3\_沿道に設置された花が会場を彩った / 4\_大会期間中、入念な打ち合わせが毎日行われた / 5\_全国から派遣された審判。公正・公平なジャッジは、大会の成功にかかわる / 6\_式典の司会も地元中学生が務めた。シナリオに目を通し確認する

この夏、市内では全国、東北の各種大会が開かれた。大会の開催に欠かせないのは、主役である選手とそれを応援する仲間や観客。そして、大会を運営するスタッフだ。

タイムスケジュールを管理する事務局、開会式や閉会式などの司会進行、大勢の観客を混乱なくスムーズに案内する受付係、コートを最適な状態に保つフロアキーパー、選手らのプレーを公平に判断する審判―など、裏方の仕事も大会運営には欠かせない。大会の成否は、準備と当日の運営にかかっているといっても過言ではない。

多くの役員が大会を支えた「全国中学校バスケットボール大会」は、8月22日〜25日の4日間、市総合体育館を主会場に開かれた。

大会の出場権を得られたのは、全国9ブロックから男女各24チーム。22日は開会式が、23日は3チームによる予選リーグが、24、25の両日は予選を勝ち上がった16チームによるトーナメント戦が行われた。会場の観客席は、各チームの保護者や関係者らで超満員。23日には、一時、入場を制限するほど観客が訪れた。

大会には、協会員や役員をはじめ、市内の中学生も補助役員として参加。合わせて千人以上が、大会をサポートした。それぞれが一生懸命与えられた役割を果たすことで、大会を成功に導く。大会という大きなパズルは、一人一人というピースによって作り上げられるのだ。

大会の運営だけでなく、選手や観客に対するおもてなしも忘れない。会場の外では、会場周辺に置かれた花のプランターが選手が出迎えた。試合だけが、すべてではないのだ。

役員らは、今年3月から準備を開始。何度も打ち合わせを重ね、綿密な計画を立ててきた。膨大な準備期間に比べれば、大会期間は一瞬。しかし、そこで得た達成感や感動は、一生記憶と心に刻まれる。

大会のサポートや運営に携わる人たちにとって、それは「参戦」。観戦ではない。大会に懸ける熱い思いは、選手に匹敵する。